

オーディオドラマ
「グリーン教国01
悲しい出来事」
エリー

シナリオ

<登場人物>

ポタン
ハシバミ
マロニエ
ローズ
シラカバ

<本文>

N「これから語るのは、グリーン教を信じる、グリーン教国、レッド帝国、ブルー共和国から集められた子どもたちの物語」

N「グリーン教とは、生きているだけで素晴らしい！を第一教義にかかげる。女神の子宮である宇宙に、神の胎児の細胞として人々は生きると考える。全ての生には意味があり、女神レッドに愛され、男神ブルーに守られ、すべての始まりであるひとり神グリーンの鼓動に合わせて世界は動いている」

N「しかし、神に愛を注がれ、祝福を受けても、悲しい出来事は起きる。生きているだけで素晴らしい！と思えない日もある」

N「そんな問題を抱える日々を一緒に過ごす4人の子どもたちについて紹介しよう」

N「マロニエはグリーン教国の王子で、王家の人間の務めとして7歳まで森でレンジャーの修行を受けた。自然、特に天を愛し、宇宙と一体になることが大好き。小さなことは気にせず、前だけを見て強く生きる」

マロニエ「俺は思う。宇宙の大きさに比べれば、人間はとても小さい」

N「ローズは、レッド帝国の王女で、大切に大切に守られて育てられたため、いざ王家の人間の務めとしてグリーン教国の城で信者修行を行うことになった時、何をどうしていいかわからず、泣いた。泣いて、泣いて、泣き続けた末に、できないものは仕方がないと開き直った。自分の気持ちやテンションを何より大切にマイペースに生きる」

ローズ「わたしはわたしの。分かった？」

N「ハシバミは、ブルー共和国の資本家の息子で母親が大好き。ご学友などになって母のそばから離れたくなかった。しかし、父親が名誉を望み、母親にハシバミが首を縦に振るように説得すると責められていることを知り、母親を救うために城に入った」

ハシバミ「ぼくは母さんに会いたいよ」

N「ボタンは、貧民街のシラカバの話聞くのが好きで、家の手伝いが終わると遊びに行っていた。そこへお忍びでやってきた3人。ボタンがシラカバに質問し、自分の意見を言う姿を見て、面白いやつだと思い、ご学友として選ばれた」

ボタン「わたしはご学友という名誉には興味がないけど、城は本があるから好きです」

N「4人は7歳で出会い、一年が経ち8歳になった。彼らは12歳までは勉強が仕事だ。13歳になると義務を与えられ、午前中は職務に励む。午後から自習室で今まで同様に勉強して過ごす。そして、15歳で義務を終えて16歳で大人になり、それぞれの国に帰ることになっていた」

N「一通り読み書き、計算を教わると、あとは何をしてもよかった。マロニエは哲学、ローズは小説、ハシバミは詩、ボタンは歴史の本を読むのが常だった」

N「今日は、ハシバミが一年ぶりに母親に会えることになっていたのだから、嬉しさで自然と笑みがこぼれた」

N「先生が来るとハシバミはボタンに見送られて自習室を出て行った」

ボタン「行ってらっしゃい。楽しんで」

ハシバミ「うんと甘えてくる」

N「残された3人は本を読んだ。するとハシバミがすぐに戻ってきて、机にうつ伏した」

ボタン「ハシバミさん、どうしたの？」

ハシバミ「お母さんは風邪を引いてこられなかった。本当に風邪なのかな？ 重い病気で死んじゃったらどうしよう！」

ローズ「風邪だって言ってるんだから風邪でしょう。うるさいからわめくのはやめてよね！」

マロニエ「二人とも小さなことで怒るなよ。もっと冷静に過ごすことが信者として大切じゃないかな？」

ボタン「悲しい日もある。こんな時、どうしたらいいかわたしには分からないけど、シラカバさんなら分かるかもしれない。今から行ってみない？」

ローズ「ちょうどきりがいいし、気晴らしに付き合ってもよくてよ」

マロニエ「彼がどういうのが興味ある。行ってもいい」

ハシバミ「ボタンが言うなら行ってもいいかな」

N「4人は自習室を出て貧民街の門の横に座り、人々に話を聞かせるシラカバのところを訪ねた」

。まだ人々は働いている時間なので誰もいなかった。シラカバはムシ口に横たわりうたた寝をしていた。しかし、ボタンたちが近づくと起き上がり、手招きした」

ボタン「悲しい出来事があった時、シラカバさんならどうしますか？」

シラカバ「悲しい出来事というのは、何も不安を持っていなかったのに、突然、予想していなかった悪い出来事が起きて悲しいと感じることで生まれる」

マロニエ「なるほど。確かにそうかもしれません」

シラカバ「たとえば、友人に会う約束をしていて、会える日を楽しみにしていた男の子がいたとしよう。約束の日に会えるとなんの疑いもなく信じていたのに、当日に約束の時間になっても友人は現れなかった。待っても待っても現れず、とうとう諦めて家に帰った。どうにもならない事情があったのだらうと悪くとらないでおこうとしても、なぜ、どうしてという疑問が渦巻、心が痛む。それでも友だちを信じようとした。しかし、他の人と一緒にいたという噂を耳にし、自分は裏切られたのではないかと疑いの気持ちを持つ。とても悲しくて辛い」

ローズ「何の疑いもなく頭っから信じるからいけないのよ」

シラカバ「そう、一度悲しい出来事があると、「また起きるのではないか？」と疑う気持ちが起こるようになる。「また嫌なことが起きるのではないか？」と疑う気持ちのことを「心の傷」と呼ぶ。つまり、悲しい出来事には、実際に起きた問題そのものと、それが再び起きるのではないかと恐れる予測の問題がある」

ボタン「何の疑いもなく心安らかに信じていた気持ちから、もしかしたら悪いことが起きるかもしれないと構えるようになるということですね」

シラカバ「そうだ。「もう約束なんてしない！」と全面的に拒絶することも、「絶対来ると保障しろ！」と相手を縛ることも、「会って話したい」という願いを叶えるためには邪魔な感情だ。どうするのが一番いいと思う？」

マロニエ「俺なら今回はダメでも次回は大丈夫かもしれないから、疑わず信じて許してあげる。そういう態度が人として適当だと思う」

ローズ「ローズなら自分も約束を守れないことがあるから気にしない。そんな気分だったんだからしょうがないと思う」

シラカバ「二人とも約束を破られる側として考えたのだな。では、約束を破った側だったならどうする？」

マロニエ「俺は何があっても約束をやぶったりしない。もし破ったなら自分が悪いのだから謝って許してもらおう。そして、次は必ず約束を守る。信頼を取り戻す」

ローズ「どうせわたしはいい加減で信頼がないですよ。でも急にやるたくなくなることだってあるし、自分に嘘をついて無理して周りに合わせるより、やらないことを許し合った方がいいんじゃないの？」

ボタン「約束を守ることを絶対化して守れなかった時に許さず、二度と信頼しないのは行き過ぎだと思う。自分もまた約束を守れないことがあるのだから、許すことも必要だと思う。しかし、許されることを前提として、できるのにやらないを許したら、何も決めることができなくなって

しまう。それならそもそも決めることをせずに、結果的に一緒に行動することはあっても、計画して一緒に行動することはやめた方がいいと思う。そうすると偶然性に左右されるから、会いたくても会えないという問題が起きてしまう」

シラカバ「そう、どちらを重視しても、一長一短だ。ボタンならどちらを選ぶ？」

ボタン「病気などの不可抗力でできなくなった場合は、自己管理がなってない！などと責めないで、仕方がなかったと受け入れます。では、気分はどうか。他人からはそんな理由でと思いますが、本人には譲れないことなのかもしれません。わたしなら、気分で動く人と約束はしたくありません。しかし、どうしても付き合う必要があるなら、会う場合と会わない場合の計画を立てて、どちらでもよいようにしておきます。会えるなら一緒に過ごしますし、会えなければ一人で過ごします」

ハシバミ「でもどうしても会いたくて、会えない可能性なんて考えられない重要な約束だってあるでしょう！」

ボタン「そうね、そういう時もあるわね」

マロニエ「俺は、何事にも執着しないで、いつでもフラットな気持ちを保つことが修行であり、信者として正しい態度だと思う」

ローズ「気になるもんは気になるんだから、気にし続けるでしょう！」

ボタン「今日、今、この瞬間の悲しみは、悲しむことでしか癒されないと思う。でも悲しむだけ悲しんだら、まだ起きてないことを恐れず、希望を持って、相手を信じる気持ちを持つことが大切だと思う」

ハシバミ「どういう意味？ 僕はどうしたらいいの？」

ボタン「お母さんに会えなくて悲しい気持ちを否定せず、無理して明るく振る舞わなくてもいいと思う。でも次の機会があると信じて大きな視点で前を向くことも大切だと思う」

ハシバミ「だけど来年まで会えないんだよ。そんなに待てない。今すぐ家に帰りたい！」

ボタン「お母さんもきっと同じ気持ちで辛い思いをしていると思う。自分のせいで帰ってきてしまったら、苦しむと思う。会えなかった分、会えたら言いたかったことを手紙にして渡したらどうかしら？ 喜んでもらえると思う」

ハシバミ「僕なんて言えばいいのか分からないよ。ママ愛してるだけでもいいの？」

ローズ「めっちゃストレート。笑える」

ボタン「好きを好きって言えるって、素敵なことだと思う。いいんじゃないかしら？」

ハシバミ「僕、書くよ。お父さんに持って帰ってもらう」

ボタン「そうね。じゃあ、城に戻りましょう。シラカバさんありがとう。これ少ないけど食べてください」

シラカバ「ありがたくいただくよ。さようなら。またいつでもおいで」

N「4人は城に戻った」

ボタン「お父さんは明日帰るんでしょう？」

ハシバミ「うん。手紙こんな感じでいいかな？」

N「ボタンたちがのぞくと、白い紙に大きく「ママ愛してる」と書いてあった」

ボタン「いいと思う」

ローズ「全然ダメでしょう。かわいくないもん」

ハシバミ「じゃあ、どうしたらいいの？」

ローズ「お花をつけるとか、もっと工夫しなさいよ。あと、むき出しのままじゃなくて封筒に入れてね」

ハシバミ「どうしよう。花も封筒もないよ」

マロニエ「形より心が大事なんだからローズの言うことなんか気にする必要はない」

ローズ「気持ちは形にしないと分からないから気にしなさいよ」

ボタン「封筒は紙を折れば作れるわ。生のお花は帰るまでにしおれてしまうから、花の絵を同封したらどうかしら？」

ハシバミ「明日までにできるかな？」

ボタン「封筒はわたしがつくってあげるから大丈夫」

ローズ「そしたら絵はわたしが描いてあげるしかないじゃない」

マロニエ「それなら俺は道具を用意しよう」

ハシバミ「ありがとうみんな」

N「悲しい出来事は、少しだけ楽しい思い出に変わり、みんなの心に刻まれました」

パターン

<構成>

誰かに問題が起きる。

シラカバのところに相談に行く。

マロニエとローズの言い合い。

ボタンの分析と関係の説明。

問題を現実に落とし込んでどうするか答えを出す。

日常に戻り一歩踏み出す。

テーマを変えて10分から20分くらいにまとめていく予定です。

「現実の出来事を、視点を上げて上から下に向かって言葉で考察して、現実に落とし込んでいく」という形になっています。